

身なりを整えることで家族の思いが好転した事例

誤嚥性肺炎のため入院した認知症の既往のある80代のA氏。入院前はサービスを利用しながら自宅療養していた。認知症の進行によりADLは徐々に低下。自身で排泄管理や食事摂取は困難な状態。記憶の保持時間は数時間程度で、過去の仕事やライフイベントについての質問には答えることができない。自宅では妻と二人暮らしで、入院時より妻から「最近何も出来なくなって」「このまま私のことも忘れてしまう」等ネガティブな発言も多く聞かれた。妻からはA氏は定年まで公務員として真面目に勤務しており、毎日整髪剤でセットし、スーツを着て出勤していたと聞くことができた。

A氏は自身で整容を行うことが困難であり、髭は伸び、仰臥位によって後頭部の毛髪はからまっていた。私は妻の面会日にA氏の洗髪をした。車椅子に移乗し、鏡の前で髭剃りを渡すとA氏は自身で髭を剃ることができた。普段は感情の乏しいA氏だが、洗面所で自身の姿を確認するとわずかに笑顔をうかべた。



妻は身なりを整えたA氏の姿を見ると「まあお父さん、仕事してたときみたい」と笑顔で話しかけ、髭剃りもほとんどA氏が行ったことを伝えると驚かれた。妻は、認知症を患うまでは世帯主や父としての役割を完璧にこなしていたA氏が、日々できないことが増えていくことに不安や苛立ちを感じていたこと、本当は髭剃り等も妻がしたかったが、食事や排泄等の介護をすることで精一杯だったことを話してくださった。その後もA氏の壮年期のお話を聞く中で「本当に何でもしっかりやる人だった」「久しぶりにお父さんを褒めた気がする」との発言があった。

患者家族にとって患者の輝いていた時代や過去は忘れることはできない。進行する病状の中でそのときと比較し、できない部分に注目しネガティブな感情をもつことは不自然ではない。その感情は何もしなければ日毎大きくなり、介護疲れや最悪の場合虐待にもつながりかねない。今回の事例のように残された能力に気づき、それを家族に伝えることは、入院中一番身近で患者をみている看護師だからこそ出来ることである。また過去を他者と回想することで、認知症を患うことで別人になったのではなく、過去の延長として現在のAさんがいることも再認識できたのではないだろうか。

私はA氏へのケアの一貫として整容を行ったが、家族にもポジティブな反応がみられたことで、患者への看護は家族看護にもつながることを改めて学ぶことができた。認知症の一般的な経過として初期から整容が出来なくなることが多く、治療を最優先する急性期病院ではそれは後回しにされがちである。今回の事例の学びから、今後も日常的にケアを行なえるように自身はもちろんスタッフにも指導していきたい。